この山に天六郎という化物がいる。年経た化鳥ともいう。常に「泣く者喰いたい」と鳴く声が聞こえ、この声を聞くと、泣いてる子どもも泣き止んだといわれる。それからというもの、今日に至るまで、子どもが泣くと母や子守は、「泣くと天神山の天六郎に喰われっから泣くな」と言うと、子どもの泣声はぴたりと止むという。

（「長沼名義考」より）

散々（ちりちり）川の龍燈蛍（千里千里川）

《長　沼》

町の中を流れる散々川は、川の両岸の木の葉が散って流れ込むので、散々川と呼ぶようになった。

ここの龍燈蛍は四季にかかわらず、小雨降る夜、あるいは薄月夜の頃に水中より出る。それは直径八、九寸位（二五センチ程）の火の玉でブラブラと現われ、川筋を幾度となく上がり下りし、ついにその火の玉は砕けて、数千百の蛍となって、東西南北に飛び去るという。

宝歴の頃、磐瀬茂貞という人が、ある冬の夜、本念寺の墓場で火の玉が墓の中を転び廻るのを見た。その玉は、しだいに近寄って、茂貞の足元まで転がって来た。持っていた杖でその火の玉を打砕いたら数千匹の蛍となって飛び去った。茂貞は、「冬の夜に蛍がいるのか、大馬鹿ものあとで化けろ」と言い捨てて、家に帰ったという。

龍燈の現象は、安積郡守屋妙見山、石城の赤井嶽など、その代表的なものだが、いずれも海中河中沢間より出るもので、散々川の龍燈蛍は川筋を上り下りして、ついに砕けて飛び去るということを考えれ